



189号  
2013/ 12 /1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’  
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli-san.com/>  
Eメール:[wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)  
◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



「成都の一人っ子ファミリー」 四川省成都市にて、2007年9月20日 撮影  
6年前に故郷の四川省成都市に帰省している折に街角で撮った一枚である。中国では1979年から一人っ子政策が始まり、ほとんどのファミリーは一人の子供しか育てられず、ある程度の人口抑制に成功したが、少子高齢化が先進国より急激に進んでいる懸念も強まっている。最近閉幕した中国共産党第18期中央委員会第3回総会で、夫婦のどちらか一方が一人っ子であれば第2子の出産が認められるようになり期待が高まったが、山東省でまた一人っ子政策に違反したと言われた女性が、ヤミ施設に連行されたり、違法に拘束されたとマスコミに伝えられた。  
在日華人向け新聞編集者 劉 怡祥

(12月号の目次は、最終ページに掲載しております)

久しぶりで、ゆっくりと北京へ行って来ました。「ゆっくり」と言っても、3泊4日、正味2日半の日程でしたが、目的が、参加している中国語教室の教科書を買う為だけのんびりした旅でした。実は、8月の末に中国北部の満州里とその周辺のフルンベル高原へ行く、内輪のグループ旅行に参加を申し込んでいたのですが、これが参加者不足でキャンセルになり、欲求不満に陥っていました。そこへ中国語教室の教科書を変更する話が出て、日本で買うと随分高いので北京へ行って直接買って来ることになり、欲求不満を解消するために、夏の旅に参加予定だった友人と2人で勇んで出かけたのでした。

新聞やテレビでは、北京の空気が酷く汚れて、道行く人も殆どがマスクをしている、と報道していました。北京オリンピック前まで北京にいた時は、市政府が厳格に実施した《大気汚染防止条例》のお陰で、空気が随分きれいになったと思っていたので、最近のマスコミの報道は信じられませんでした。ところが、10月初旬に来日した友人が見せてくれた3枚の写真を見て、報道があながち誇張ばかりではないとの印象を持ちました。

写真は、以前私が住んでいたマンションの窓から撮ったもので、1枚は晴れた空を背景に遠くのテレビ塔がくっきりと見える、懐かしいものでした。次の1枚は、霧がかかったような写真ですが、かすかにテレビ塔が見えて、同じ場所から撮った写真だと分かりました。最後の1枚は、画面いっぱいに乳白色の空間が見えるだけで、同じ場所から撮ったと聞いてテレビ塔を探しても、まったく見えませんでした。それで、大気の悪化は想像以上と納得しました。

北京空港到着は昼頃でしたが、雲の中を着陸するようで「やはり…」とちょっと身構えましたが、着陸してみると飛行場も街中も、かなり遠方まで見えていて、ちょっと拍子抜けでした。そして翌日は、ちょっと寒く感じましたが、からりと晴れて気持ちの良い空が広がりました。この日の午前中は丁度北海公園へ出かけたので、広々とした水面の上に、真っ青な空が広がって、「東京でも、こんなきれいな青空はめっ

たに見られない」と思う程でした。

次の日も、同じくらい晴れて穏やかなお天気でした。帰国の日は、朝6時前にタクシーに乗ったのですが、タクシーの運転手さんは、「昨晩は風が強かったから、今日も良い天気だろう」と話していました。そんな訳で、我々の滞在中空気はきれいで、マスクをして歩いている人も、見かけたのは全部数えても20人に満たないほどでした。

昔の北京は、夏の終わりから暖房が始まる初冬まで、良いお天気が続いて、特別に「天高気爽」とか「秋高気爽」(共に、「秋は晴れて空気が爽やかだ」との意味)と言い習わしていたのですが、工業化が進み工場からの排気ガスで、爽やかな秋空の日がだんだん少なくなって来ました。北京市政府は爽やかな秋空を取り戻そうと、石炭ボイラーの使用を禁止し、大気を著しく汚染する工場を北京市の外に移転させました。それなのに、どうしてこんなに悪化したのか不思議でした。

今回、環境の専門家である友人にその謎を解いて貰いました。最近の北京の大気汚染は、我々が一般に考えているような、自動車の排気ガスや質の悪いガソリンが主な原因ではないのです。本当の原因は、郊外及び周辺州に移転させた工場の排気ガスが、気象条件によって北京の上空に溜まってしまいうからなのだそうです。気象条件とは、日本でも天気予報などで時々耳にする、逆転層(冷たい空気が上空に溜まって、蓋の役目を果たし、汚れた空気を地上に留まらせる空気の層)のことで、寒い時期に多く起りますが、毎日発生するわけではありません。しかし、発生すると、汚染の程度は少しずつ酷くなって来ているそうです。

中国の地方行政は権限が強く、工場の移転・閉鎖等を命じることが出来るのですが、移転させる工場の機械設備に対する指導までは出来なかったようです。今頃になって、最新式機械設備導入には税制の優遇措置を施し、設備の近代化を促しているようです。無関係な人間の無責任な思いつきですが、移転を命じた時に、設備の近代化も命じておけばよかったのに、と考えてしまいました。

私の調べた諺・慣用句 25  
隴を得て蜀を望む

三澤  
統

突然ですが、人間の欲望には限りがありません。何かを手に入れたら次はもっと良いものを欲しくなり、そしてもっと沢山欲しくなったりするものです。という具合で人は満足を知りません。

今回調べた慣用句は人間のそのような欲望がテーマになっています。中国、光武帝時代のお話で、「隴を得て蜀を望む」という慣用句のエピソードです。

辞書にはそれぞれ次のように載っています。

▲小学館 デジタル大辞典：

「隴を得て蜀を望む〈隴(甘肅省の古称)の地方を手に入れ、さらに蜀(四川省の古称)を攻めようとしたとき、曹操が司馬懿に答えた言葉から)一つの望みを遂げると、次の望みが起こってきて、欲望には限度がないたとえ。望蜀(曹操は、約百年前の皇帝・光武帝の言葉を引用している)

▲小学館 中日辞典：

「得隴望蜀 dé lǒng wàng shǔ 隴を得てさらに蜀を望む；貪欲で飽くことを知らない」

この成語の出自は、〈後漢書<sup>注1)</sup>・岑彭伝〉の「兩城若下，便可帶兵南去蜀虜。人苦不知足，即平隴，復望蜀」(兩都市を落として、すぐに兵を南に率い蜀を下すべし。人は足るを知らざるに苦しむ、隴を平定後また蜀を望む)の部分です。

中国後漢時代、劉秀<sup>注2)</sup>は王莽を打ち負かした後、皇帝に就きました。当時、大將軍の岑彭は常に劉秀に就き従って戦いをし、共に死線をさまよって一緒に武力で天下を取り、功績を立てました。その為劉秀は大変岑彭を買っていました。

劉秀は東部地区を支配した後、改めて岑彭を大將軍に任命し西へと進軍しました。岑彭は劉秀につき従って天水(今の甘

肅省天水市)の地を攻め、ほどなく奪い取りました。その上さらに將軍の呉漢が蜀の將軍の隗囂<sup>がいきよう</sup>を西城に包圍しました。蜀王の公孫述<sup>こうそんじゆつ</sup>は隗囂が包圍されたことを聞くと直ちに大將の李育を救援に向かわせました。この時公孫述の部隊は上邽地方(現在甘肅省天水市)に駐屯していました。

劉秀は用があつて一旦洛陽に戻らねばならなかったので、蓋延<sup>がいえん</sup>と耿<sup>こう</sup>の二人を遣わして上邽の包圍を任せることにし、自身は洛陽への出立の前に岑彭に一通の手紙を渡しました。その手紙には次のように記されていました。

「貴公は西城と上邽の二か所を攻め下した後直に軍隊を率いて南に行き四川を攻めよ。人は満ち足りるということを知らぬものだ。我々はすでに隴の地を得た、この上は蜀の地も得たい、何としても奪い取るべし」

劉秀の目的は、隴と蜀の両地を平定して全国統一の大業を完成することでした。その後、蜀の隗囂と公孫述も岑彭によって滅ぼされ、劉秀は隴に続いて蜀の地も得てついに念願の全国統一を成し遂げました。

〈注記〉

- 1) 後漢書<sup>ごかんじよ</sup>：中国後漢朝について書かれた歴史書。二十四史の一つ。
- 2) 劉秀(光武帝)：(前6～後57年)中国、後漢の初代皇帝。在位25～57年。



イラスト Ye Lin

**【前号のお話】** 唐の貞元（紀元 785～805）時代、淳于棼という人が酔い潰れ庭の大きな槐の木の下で眠っていると、槐安国の国王から迎えが来て、槐安国・国王の次女と結婚した。その後、国王から南柯郡の太守となることを命じられた淳は、友人二人と共に南柯郡の治政に当たった。善政を敷いて人々に慕われ、子供達もそれぞれ成長し、順風満帆の日々を送っていた淳だったが…。

しかし、淳于棼の幸せな生活は長くは続きませんでした。

ある年、隣の国が突然南柯郡を攻めて来ました。淳于棼は南柯郡の治政に功績ある周弁に二万の兵を預け迎え撃たせました。周弁は必死に戦いましたが、結局その戦いは南柯の惨敗で終わりました。幸い、敵は領土を占領せず、金品や財宝だけを奪って撤退しました。

敗戦の大きな原因は周弁の作戦指揮に大きな誤りがあったことによりました。しかし、淳于棼はすべての咎を周弁に押し付けることはできない、自分も又過失があると思っています。淳于棼は周弁と共に自分も国王に懲罰を請うことにしました。しかし、周弁は親友であると同時に南柯郡太守の立場にある淳于棼に大変な迷惑をかけてしまったという自責の念から重い病にかかり亡くなってしまいました。親しい友を失って、淳も心晴れない日々を送っていました。ところが日を置かず妻も急な病で亡くなりました。

淳于棼は郡主として精一杯良い政治を行っていたにも拘らず、短い間に戦争に負け、大切な部下を失い、愛する妻を亡くし、相次ぐ打撃を受けて、まるで天からまっさかさまに地獄の落ちたような気持ちになりました。すっかり気落ちした淳は何をする気持ちも失せて、考えた末に結局太守の職を辞めて、もう一人の友である田子華に全てを委任することにしました。妻の棺と共に都に帰って、都の東に綺麗な

お墓を作り自らの手で妻を埋葬しました。

淳于棼は太守の職にあった頃、郡の政治や、経済、法律などの面で善政を敷き、多くの人々に敬愛されていました。都に帰っても、淳の家を訪れる来訪者が絶えず、帰京の見舞いにくる人もいれば、かつての太守へ挨拶に来る人もいます。また淳と親しく接したいと思う人、どうすれば出世できるのか、その方法の教えを乞う人もいます。淳の家の前はまさに門前市を成すようにいつも賑やかで人が溢れていました。

このような光景が国王の機嫌を損ねました。

「淳于棼の勢力がどんどん強くなるのではないか」

「淳于棼を取り巻く人々が国を転覆させるような集団になるのではないか」

国王は心配しました。

国王の腹心が天象を観察する役人に天運を見せました。そして、

「星の動きによると、国に大きな災難がもうすぐ起こる。その災難で都を移さなければならなくなります。その災難をもたらす方位は国王様の親しい親類が住む方向を指しています」

という結果が発表されました。

この発表で国中が混乱し始めました。国王の親しい親類といえば、誰もが淳于棼のことを思い浮かべます。国王はこの機に、淳于棼の防衛隊を解散させた上、屋敷の周りを国王の兵隊で取り囲んで、淳が外に出ないように、誰も屋敷内に入れないように厳しい監視を行いました。淳は二十年間もの間、槐安国の為に忠誠心を捧げて来ましたが、その結果がこのようになるとは思っていませんでした。

このような日々が続いたある日、国王が淳于棼を呼びました。

「我が娘をそなたに嫁がせて二十年間を幸せに過ごしたが、不幸にも我が娘は早く逝った。そなたも長く自分の家に帰っていなかったのう。気分転換に帰ってみたいであろうの」

淳于棼はびっくりして

「実家？ 私の実家は槐安国にあるのではなかったのですか」

「そなたの実家は槐安国にはないのじゃ。そなたはこの国のものではない。人間界のものじゃ。忘れたのか？」

国王の話で淳于棼は突然、既に遠く過ぎ去った日々を思い出しました。広い裏庭、古い槐樹、そして友達とお酒を飲みながら賑やかに過ごしたかつての風景が目の前に現れました。そうです。それははるか昔、自分が送っていた生活です。それはなんと穏やかで暖かい生活だったことでしょうか。淳はその頃の日々を思い浮かべると共に「なぜ自分がこの地で無実の罪を着せられて傷つき、冷たい人情に耐えていなければならないのか」とも思いました。

「そうでした。確かに此処には私の家はありません。ではお願い申し上げます。私を実家まで送ってください。ぜひお願いします」

国王が手を振ると、紫色の服を着た従者が二人現れました。彼らはその昔、淳を槐安国へ連れて来たもの達です。

従者は淳を手で招いてついてこいの合図をしました。淳は使者の後について、玄関をくぐりでると、外には、馬車がすでに用意されて待っていました。しかし、その馬車にはやせさらばえた馬が繋がれ、車体も使い古したぼろぼろの馬車でした。しかも紫色の服の二人の従者以外は供する者も居らず、昔槐安国に連れて来られた折の雰囲気とは全く違いました。

淳于棼は複雑な気持ちで馬車に乗り込み、家に帰る道を進んで行きました。道ばたの風景は、来たときと一切変わっていないのですが、その時からあっという間に二十年を経てしまったのでした。

淳于棼は一刻も早く故郷へ帰りたいのですが、痩せ馬は力なくのろのろ歩くので、実家のある広陵へはなかなか着きません。

「まだ遠いのですか？ 後どのくらいありますか？」

淳が従者に訊きました。

「焦るな、もう遠くはないよ」

長い間、我慢して馬車に乗っていましたが、前方

に大きな洞窟のある槐の樹が現れ、馬車はその洞窟を通り抜けると、とても懐かしい景色が淳于棼の目の前に広がっていました。

広い庭、葉が黒々と茂った樹木、立派な屋敷、可愛がっていた犬、いずれも見慣れて熟知していた景色です。それらは少しも変わっていないのですが、淳自身の頭は既に白髪になってしまいました。懐かしい風景を目の前にした淳于棼の心に悲しみが込み上げて来て、ひとりで涙がぼろぼろと溢れて来るのでした。

従者は淳の肩を叩いて告げました。

「さあ、着きましたよ！」

(続く)

## 中国の笑い話 11 (「365夜笑話」より)

### 第29話：羅針盤

子供「パパ、僕羅針盤を作ったよ。パパに上げるよ。」  
父親「君が持ってて遊べば良いよ。パパにくれようしようと言うの？」

子供「パパは、いつもバーから出ても家へ帰る道が分からなくなってしまふんでしょ。早く家へ帰れるように使えば良いよ！」

### 第30話：親子の不仲

先生「皆さん、今日は家庭の問題について討論しましょう。討論のテーマは、“親子の不仲”です。皆さん、あなた方は、親子の仲が悪い現象を解消するには、どんな方法が良いと思いますか？」

生徒「先生、一番良い方法は、先生が、今度僕の成績表に全部5を付けてくださることです」

### 第31話：軍事秘密

父親が、軍隊にいる友人宛の手紙を、通学路の途中にある郵便局で投函するように言いつけた。放課後、子供は帰宅して父親に言った。

子供「お父さん、頼まれた手紙、郵便局のポストに投函したよ」

父親「投函したって！私は手紙に友人の住所を書き忘れたんだが、気が付かないで投函してしまったのかい」

子供「住所が無いのは気が付いたよ。でも住所は軍事秘密なんだと思ったんだ」

2013年7月21日(日)の朝となった。昨夜は8時ころ夕陽が沈み、ようやく夜の帳が下りはじめたが中央大街は人々でごった返していた。各所でミニコンサートが開かれ、モデルンホテルの二階のテラスではロシア人と思われる女性歌手が素晴らしい喉を披露していて、皆歩みを止めて上を見上げている。どのレストランも客でいっぱいであったが、何とか入り込むことができ夕食をとった。大連では繁華街でも白人を見ることが少ないが、さすがにハルピンは白人の観光客が目についた。結局夜10時半過ぎにホテルに戻った。

という次第で朝はゆっくり起床し、迎えに来た友人とホテルの近くにあるKFC(ケンタッキー)に入った。私は、コーヒーとアップルパイとポテトを注文した。話が少しそれるが、帰国して数日経った7月29日の朝日新聞に「中国のKFCが三重苦」との記事が載った。成長促進剤で育てたニワトリが問題になっていたところに、氷から中国国内の基準の19倍の細菌が検出されたことが報道され大きな問題となり、業績不振に落ち込みつつある、というのである。私が注文したのものには問題あるものはなかったが、チキンナゲットやオレンジジュースを注文した友人の腹具合も特に変化はなかった。けれども中国ではやはり食べ物には注意した方がいい。

さて、今日は太陽島観光が中心である。前号で紹介したように市内から見ると、松花江の対岸の緑に覆われた島が太陽島である。なぜ太陽島と名付けたのかは知らないが、中国人の多くは行ったことがない人も太陽島は知っていて、一度は行って見たいところらしい。ハルピンには既述のように1898年の中ソ間の条約後、一気にロシア人が増加したがこの島には彼らの別荘がたくさん建てられたことがよく知られている。

我々はホテル前からタクシーに乗り、ヨーロッパの古城に似せたロープウェイ乗り場に向かった。歩いても行けない距離ではないが、何しろ今日も晴天で午前中から暑くてたまらない。乗り場は、ゴミが散らばっていてお世辞にも綺麗とは言えない階段を3階まで歩いて登ったところにある。外国からの観光客も多い



西洋の古城を思わせるロープウェイ乗り場



松花江を背に(太陽島にて)対岸はハルピン市内

のにもうすこし小奇麗にできないものであろうか。

太陽島に行くのにはバスなどで松花江のやや上流に架かっている橋を通って行く方法と船で行く方法、そしてロープウェイの3通りがある。前回ハルピンに来たときは、船で対岸に渡ったので今回はロープウェイで行くことにした。さっそく往復80元の切符を買う。

4人～6人乗りの小さなゴンドラに乗り込むとすぐ発車して一気に大空に向かって昇って行く。景色もそれに連れて遙か遠くまで見渡せる。川の中央あたりが一番高くなっているが、川幅が広いためかなりの時間空中散歩の気分が味わえる。人気が高いのもうなずけた。まもなく太陽島に到着。階段を下りて1階の出口に向かうとアイスクリームを売っているお店があり早

速求めた。前回来た時のことを思い出しながら足の向くまま散歩する。前方に別荘であろうか。いくつかのロシア風建築が残っている。大分傷んでいたが、壁面を見ると歴史的建造物であることの説明が書かれた銅板が貼ってある。当時の栄華の一端が窺えた。

また土手に上がると電気自動車が来たので乗り込む。暑い日にはありがたい。公園は広く、その中に人造湖の荷花湖や日本式庭園の「ハルピン新濶友誼園」や冰雪芸術館などがある。

ハルピンと言えば、冰雪祭りが有名で、極寒の時期にもかかわらず多くの観光客でにぎわうらしい。1985年に始まったというから、64回目を数える札幌雪祭りには及ばないが、今冬が29回目である。メイン会場はこの太陽島と前回紹介した兆麟公園だそう。大連勤務中に一度は見に行きたかったが、遠いうえに寒さに弱い私はつつい行きそびれてしまった。高速鉄道が開通した今、いずれ見に行きたいと思う。

ロープウエー乗り場の近くに「太陽島ロシア風情小鎮」があり20元払って入る。入場券の代わりにこの場所専用のパスポートをくれる。サイズは少し小さいがロシアのパスポートとそっくりだそう。小鎮内にはロシア風の建物がいくつも建っていて「カチューシャ」の曲が流れている。奥の建物ではロシアの民族舞踊のショーをやっている。ロープウエーからの景色は素晴らしかったが、私には太陽島はさほどの観光地とは思えなかった。国家観光局でもトップクラスの5A級ではなく4A級の評価になっている。

このあと本当は太陽島の北方に隣接している中国版サファリパークである「東北虎林園」で虎を見に行きたかったが、歩いていける所ではないし暑いし時間もかかりそうなのでまた空中散歩して市内に戻った。まず手元の人民元が少なくなってきたので中国銀行に行き換金することにした。友人にレート聞いてもらうと、1万円は手数料を引かれると600元にもいかない。昨年は800元くらいあったのにアベノミクスのおかげでかなりの損失である。とりあえず3万円だけ換金し様子を見ることにした。

その後タクシーに乗って市内見物に繰り出し、在来線のハルピン駅に向かった。ハルピン駅と言えば、伊

藤博文が暗殺されたところで有名であるが、アールヌーボー様式の華麗な駅舎は取り壊され今は正面が野球のホームベースの形をした安っぽい建物となっている。事件当時の面影はどこにも残っていないという。長春駅もそうだが、各都市にあった城壁といい、もうすこし歴史的建造物を保存するという文化を持ってもらいたいものである。

ここで少し本事件を振り返ってみたい。1905年に日露戦争に勝利した日本は東北地方の経営に乗り出した。1909年10月26日に当時枢密院議長であった伊藤は、満州・朝鮮問題に関してロシアの蔵相と会談するためハルピン駅に赴いた。列車内で蔵相と会談後、駅のホームでロシア兵の閲兵を受けていた伊藤は群衆を装った安重根に銃弾3発を撃ち込まれ、30分後に絶命した。安はその場でロシア官憲に逮捕され2日後日本側に引き渡された。1910年2月14日、旅順の関東都督府地方法院で死刑判決。3月26日死刑執行、31歳の生涯を閉じた。その5か月後の8月29日、日韓併合で大韓帝国は消滅した。伊藤は日韓併合には反対であったといくつかの資料には書かれているが、もし暗殺されなければ歴史は違っていたかもしれない。この事件の歴史的評価は日韓で大きく異なるのはご承知の通りである。韓国では彼は抗日闘争の英雄とされ、ソウル市には「安重根義士記念館」があるようだ。私は一昨年旅順監獄を見学したが、その時安重根の収監されていた赤レンガ造りの独房を見た。小さな窓の横に「囚禁朝鮮愛国志士安重根の牢房」とありその下に説明文が記載された銅板が貼り付けてあったが、それを思い出すたび心は重い。

この事件に関し、ネット上に記載されているエピソードを紹介したい。私も全く知らなかった――。

①旅順監獄の独房に収監された安の監視に当たった日本人看守であった“千葉十七”は、当初伊藤を暗殺した安を憎んでいた。しかし話を重ねる毎に安の人柄や思想に共感を覚えるようになった。そして処刑の直前に千葉に「東洋に平和が訪れ、韓日の友好がよみがえった時生まれ変わってお会いしたいものです」と語ったそう。処刑後、千葉は終生供養を欠かさなかった。彼のお墓のある宮城県栗原市にある大林寺には安の顕彰碑が建立され、1992年から日韓合同で毎年

千葉夫妻と安重根の合同供養が営まれているという。

②安重根の息子・安俊生は親日家であった。ソウル市内に1932年建立の伊藤博文を祀った博文寺というお寺があったそうだが、俊生は1939年に博文寺を訪れ伊藤博文に対して焼香したという。韓国独立後博文寺は破却されている。――

伊藤博文暗殺事件に対しては浅学の私は意見を控えたいが、この二つのエピソードは不幸な出来事を乗り越え、日韓の友好のために胸に刻んでおくべきことではなかろうか。

ハルピン駅に行ったのは、ハルピン西駅になかった高速鉄道の時刻表を求めるためでもあったがここにもなかった。皆不便ではないのであろうか。駅を後にして東北地方一の高さを誇るテレビ塔に行った。今回初めて見たがデザインはすっきりしていて、銀色に輝いている。高さは東京タワーより5メートル高い338メートルである。塔の名称は「龍塔」(英語ではドラゴンタワー)と呼び、2000年に完成した。確かに龍が天に昇るイメージが窺える。展望台で空中散歩をしたかったがここも時間が過ぎていて下から見上げるだけであった。

そのあとソフィア寺院と共に現存するもうひとつの「ウクライナ寺院」を見学した。この寺院は何様式の建物か知らないが、ソフィア寺院よりずっと小さく、外壁はシンプルで丸みを帯びている。色合いもすこし異なる。同じロシア正教の寺院とは思えないくらいだ。この寺院はいまだに信者の礼拝に使われているようだ。

まだ見学したいところはあるが明朝は7時に起床

して8時30分の高鉄に乗車するのでホテルに向かうことにした。途中にロシア風の堂々たる建物のそばを通ったが、聞くと「莫斯科(モスクワ)大劇院」だそうでロシア人のショーや中国民族楽器の演奏などがあるレストランシアターとのこと。これまで述べてきたように街の各所にロシアの影響が見られた。

ハルピン市の稿の終わりに歴史に興味のある方に特におすすめめの場所を紹介したい。と言っても私は行ったことがないのでガイドブックや歴史書の助けを借りながら書き進めてみたい。

それは、「金太祖陵」である。中国国内には、西安市の「秦始皇陵」をはじめ北京郊外にある「明の十三陵」や河北省にある「清の東陵、西陵」、瀋陽にある「清の昭陵、福陵」など広大な陵墓が数多く存在する。

この中で「秦始皇陵」と「明の十三陵」の他はすべて女真族の陵墓である。女真族は10世紀ころ東北地方に現れたツングース系の民族と言われ、そののち瀋陽を中心とした東北地方に定住した遊牧民である。「金太祖陵」は「金」を建国した完顔阿骨打(1068年～1123年)の陵墓である。

ハルピン市の東南約20kmの阿城区にあり、車で1時間ほどで行けるようだ。5万平方メートル(約1万5千坪)余りの敷地には、玉帯橋、門殿、宝頂、寧神殿、地下宮などの遺跡が残っている。完顔阿骨打(ワンヤンア

クダと読む)はいくつかの部族に分かれている女真族の中で「完顔部」と呼ばれる部族の首長で、それらの部族を統一し1114年に建国した。「金」の初代皇帝である彼は、女真文字を制定し軍事制度を整えるなど金



龍塔 (ドラゴンタワー)



ウクライナ寺院



国発展の礎を築いた。そして契丹族の「遼」と覇を競い1125年に滅ぼした。

彼の死後も金は領土の拡張に邁進し、宋(960年～1126年・首都は開封)を南に追いやり(南宋=1127年～1279年、首都は杭州)、北京を首都にして1234年モンゴル軍(後の元)に敗れるまで百年余り中国北部を統治した。ここで女真族は滅亡したかに見えたが、そうではなかった。時代は下がって約400年後の1616年女真族の愛新覚羅・ヌルハチは再度、女真部族を統一し「金」という国を建てた。前述の阿骨打の金と区別し、歴史上は「後金」と呼ばれている。この後金が1636年に「清国」となり、1644年明を滅亡させ北京に再度入城するという長い歴史がある。

私はこれまで東陵、昭陵、福陵を初め瀋陽にある故宮、さらには瀋陽の前の都であった遼陽にある東京城や東京陵などを見てきたが、これらを見たとき女真という民族のエネルギーのすさまじさを感じたものであ

る。次回のハルピン旅行では、歴史に輝かしい足跡を残した女真族のルーツとも言える「金太祖陵」を必ず訪問してみたい。



ハルピン市の最後に、付記しておきたいことが出てきた。10月22日の朝日新聞に〈中国の大気汚染、今冬も深刻〉と見出しがあり、「東北地方の各都市で大気汚染の元になるPM2.5の数値が跳ね上がった」とある。中でもハルピン市は最もひどい場所でPM2.5が日本の環境基準値の約14倍となり、すべての小中学校が休校となった。20日には視界が5メートルしかないところもあった。原因は暖房のための石炭の燃焼量が一気に増加したことだそうだ。私が行った3か月前は汗が出るくらい暑く、空は青く澄み渡っていたのに、今は暖房がなければ生活できないのであろう。あまりの落差に驚くばかりであった。(おわり)

## 智子の雑記帳 98

### 犯罪被害者週間によせて

11月25日から12月1日までを、内閣府では犯罪被害者週間としている。犯罪被害者が置かれている状況への理解を深めることが目的だ。昨年になるが、私は、ストーカーの男に娘を殺害されたご家族の話を聴きに行ったことがある。

講演会場に現れたのは、被害者のお母さんだった。お酒が好きだと言い、いつまでも被害者だと思われるのは癪だから、毎日笑って過ごしている、心の底からではないけれど、と話す彼女は、とても感じのいい素敵な方だった。

10年以上が経過していたが、被害者の女性と同じ年齢だったこともあり、私はこの事件をよく覚えていた。それでも、お母さんから聴く話は、テレビや新聞で得た情報をはるかに超えて、辛かった。

先ほど、犯罪者被害者週間の説明に、「犯罪被害者が置かれている状況への理解」と書いた。つまり、犯罪被害者家族は、事件直後から好奇の目にさらされる、ということだ。

この事件でも、マスコミが家のみならず、被害者の友達や知り合いにまで取材に訪れたという。なかには、「女の子ですから、高く売れますよ」と、写真を求めた関係者もいた。

マスコミの影響で、家の場所はすぐに知られることとなり、知らない人が興味本位で覗きに来る。また、近所の人の中にも、挨拶を返してくれなくなったり、付き合いを拒絶する人も。「でも、だからこそ、今でもお付き合いをしてくれる人たちは、私たち家族の本当の友人です」と言う彼女は幾多の辛いことを経て、本当に強くなったのだと思う。興味本位で覗きに来られる家には、まだ住んでいるそうだ。「ずっとここに住むことで、事件を風化させないことになれば」と。

先月、女子高生がストーカーの男に殺害された。あのとき壇上で、「こんな辛い事件は、絶対に繰り返されてはいけない」と話した彼女は、何を思うのだろうか。(真中智子)



この間社会教育課は色々な行事がありました、その中で一番印象があるのは「ピーターパンフォーラム in 六戸」展でした。

開催前には私の勤めている社会教育課でピーターパンの話はよく耳にしましたが、実際のところ、その内容については何も知りませんでした。

十二月十七日に盛大に開幕して以来、私は素敵な展示品に目を引かれました。豊富な内容を毎日少しずつ

見ていました。そのうちにピーターパンに興味を持つようになりました。

展示品ではまだ不十分だと思って、図書館へ行ってピーターパンの本を調べました。もちろん中国語ではなく、日本語ばかりの絵本など様々ありました。あまりの多さで目がちらちらしました。最終、橋高弓枝の訳作を貸してくださいました。この小説は挿絵で主な登場キャラクターについて説明し、本文の漢字はすべて振り仮名がついて、わたしとしては便利でした。辞書を調べながら読んでいましたが、頁数が長くてなかなか進みませんでした。でもこちらでは中国と違って正月に長い休暇があるから、それを利用し読み続けました。ちょうど最後の日に読み終わりました。

このピーターパンは子供の夢について書いていますが、様々な夢は子供はもちろん大人も当然あると思います。中国の南北朝の東晋時代の陶淵明の「桃花源記」は皆さんがご存知だと思います。日本の国語の教科書にも採用されているかもしれません。この名作は桃花源という美しい楽園で人々は自在に暮らしている様子を描いています。この桃花源こそ従来の人々の憧れの理想地で



「ピーターパンフォーラム in 六戸」のポスター

す。なかなか現実では簡単に実現できないけれども、みんなで力を合わせればより良い環境を作ることができると思います。

新年度に入りましたが、ピーターパンの子供は大人になりたくないですが、大人はまた年をとりたいくないでしょう。同じく陶淵明の「及時当勉励、歳月不待人」（生きてるうちが花ではないか、歳月人を待たず）の詩を今回の結末文にしましょう。

「鄧さん頑張る・日本探検記」は、2004年から2006年の2年間、青森県六戸町の国際交流員として国際友好活動にかかわった、中国山西省太原市に住む一中国人・鄧仁有さんの日本体験です。文章は原文のままです。

### 【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。

又'わんりい'の活動についてのご希望やご意見及び'わんりい'に掲載の記事などについても、簡単にご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

## 真夏の韓国低山歩き ③ (2013.8.16～21)

関根 茂子

Tさんと11:25に出発する。岩場に取り付けられた鉄階段を手すりにしっかりつかまりながら下ったり登ったり緊張の連続だ。Tさんが「素晴らしい景色だよー」と見るように勧めてくれるが、見ると怖くなるから私は足元と眼の前だけをみつめて歩く。片側しか手すりがない登山道もあったが、今日は月曜なのですれ違う登山者が少なくて助かった。

時々、西に甲寺(カプサ)側に巻く平らな道が出てきてほっとする。前方に鉄階段で登る峰が見えて「あれを登ればおしまいだ」とがんばる。ところが登り着けばそこは前衛峰で本峰はまだ先だった。下ると分岐、ハングル文字の形で三佛峰は右と判断して進む。最後は鉄階段登りで12:50、岩峰の三佛峰(サンブルボン)777mに出た。

そこには、冬の霧氷の写真看板と来し方の展望図板があり、フランス人女性2人組が休んでいた。後から着いたポットを持っている私たちのお湯で4人いっしょに紅茶を飲んでひと休み。その後「下でAさんが待っているから」と2人はさっさと下山していく。私もここでのスケッチを諦めて13:15、下山を開始する。10分ほど東鶴寺溪谷への分岐から南の谷を下ると、立派な石塔が2つ建ち並ぶ大勢の人がいる平地に出る。13:35、ここが、男妹塔(オニタブ)<sup>注1)</sup>だ。

石の道を下る。ところどころ土の部分踏むと足が喜んでいる。途中の沢水を横切るところでは手拭

いを濡らしてひと息つく。この時刻に登ってくる人がいた。

14:30、往路に合流。ここでTさんは先に行き、ひとりでのんびり樹をみながら歩く。山門入口の沢では涼を取る家族連れや仲間連れが大勢遊んでいた。

朝は閉っていた案内所に立ち寄って「鶏龍山の地図が欲しい」と言うと女性が日本語で「韓国語の地図しかない」とハングルの地図を差し出してくれた。14:45冷房の効いたコンビニに戻り着く。Aさんが氷あずき(パッピンス)を食べている。私も同じものを買う。融けるのが待ち切れず、アイスコーヒーも買い求める。これが氷だけのカップに液体パックをセットで買う仕組みだ。液体パックにはコーヒブラックや砂糖入り、ジュースの類などいろいろあるようだ。このやり方はなかなか合理的で日本にも導入されるといいな。

帰りもタクシーを呼んで温泉ホテルに戻って、16:30から待望の大浴場入浴へ。お風呂は日本の公衆浴場と全く同様の造りだった。広い湯船にのんびり浸かって久し振りに銭湯気分を堪能した。

風呂上がりでもう暑い屋外に出る気分ではない。夕食は冷房のあるホテル2階のレストランにする。メニューは3種類、俗離山の下でみた小さな巻貝らしきものが入った辛くない汁物をわたし、S、Aさんが、肉入り赤い辛い汁物をTさん。貝も辛いのも



観音峰



観音峰から三仏峰への縦走路



三仏峰記念撮影

苦手のYさんはおかゆを注文する。出てきた貝汁には緑色エメラルドグリーンの小さな貝の身がたくさん入っていた。食後、ホテルレストラン担当の若い男性に「これは何？」と聞くとスマートフォンで貝の写真をみせてくれた。

名前も書いてもらって注2) 帰国後、ネットで調べてみた。

毎日コンビニおにぎりと菓子パンばかりだったので、野菜と果物が無性に食べたい。Tさんが坊やに教えてもらったスーパーに果物を買いに走ってくれる。ほんと、久しぶりにリンゴを食べられてうれしかった。Tさん、ありがとう！（トマトは後からひとり分ずつチャック袋に入れて配られる。袋まで持参とはなんと用意周到なTさんでした）

◆20日(火) テドンサン大屯山(878m)注3)

7:00、タクシー2台分乗で大田東部バスターミナルへ。まずは、重いザックをコインロッカーへ預けるべく、在りかを探す。次は入れ方、集中管理の機械があって、使用するロッカー番号を登録しないとお金を入れても鍵が回らない仕組みになっていた。それが分からずに困っていると親切な男性が機械のボタンを操作してくれた。身軽になってこれから朝御飯をと思っていたら、大屯山登山口に直接行くバスはなく、クムサン錦山で乗換とのこと、聞けば07:35発錦山行きバスがあるというので、即乗車となる。

Sさんによると錦山は忠清南道(チュンチョンナムド)の南東端に位置する高原盆地で寒暑の差が大きい。畑地が水田より多く、とくにこの地の砂壤土はチョウセンニンジンの生育に適し、「錦山参」として有名とのこと。



男妹塔

確かに、車窓には黒い寒冷紗をかぶせた人参畑がそこそこに認められ、地図にも国際人参市場なる文字もあった。錦山バスターミナルに着けば直通バス08:37発が待機している。

09:00過ぎ登山口着、オフシーズンのバスターミナルは無人で売店も閉っている。それでもロープウェイ乗り場に向かう大通りには食堂が軒を並べ、盛んに呼びこむ店もあった。その店で冷麺を食べるとこれが細麺で冷たくおいしかった。食後はホットコーヒーのサービスもあり、コーヒーの紙コップを手にロープウェイ乗り場までゆるゆる上る。

09:55~10:00閑散とした乗り場に着く(ロープウェイは全長927mを6分で20分間隔運行)。ガラガラのゴンドラの人となる。11時の下りに乗ることに決める。足が不調のAさんは手近の展望台で待機とのこと。

4人で階段を登り始めるが、足の速いY・S組にたちまち置いていかれた。少し行くと金剛雲橋(クムガンクルムダリ)が出てくる。足元をみれば高度感はずばりだが頑丈な吊り橋なのでさほどの怖さはなかった。渡った先の展望台から前方に雲の梯子ともいべき赤い金属階段が立ちあがっているのが望める。ここで残り持ち時間は40分間、私の鈍足では登頂は無理、あの階段も怖いので、ここでスケッチに専念しよう。岩峰に松の山水画は難しく手こずっていると、Tさんが戻ってきた。少し先まで行ってはみたが、百歳のお父さんを見ているので「自分に何かあったら・・・」と自重したとのことだ。

下りにも時間がかかる私もスケッチは早めに切り上げて階段を下っていると、山頂まで上がった



男妹塔の由来説明版

健脚の2人に追いつかれてしまった。さすがに早い! 前は雨で登れなかったSさんは満足の様子だ。帰路のロープウェイの谷間にはモミジの木も多く、この山は紅葉の時期は大賑わいになるのだろう。手前のお店でまたまたメロンアイスバーを買って舐めながら11:25、無人のバスターミナル着。そのうち年配の男性が一人現れ、彼は日本人で大阪から韓国の山を歩き回っているとのことだった。バスが来るまで大屯山の山並みをスケッチする。発時刻が来てもバスは来ないので絵はそれなりに完成できた。

11:47遅れてきたバスに乗り込み、錦山12:17着、12:25発。帰りのバス車窓から街路樹を眺めているとユリノキ(ハンテンボク)の並木を発見、わが国で街路樹にユリノキを見たのは長野から志賀高原へ行くバスからだけだ。

大田13:13着。昼はチヂミを食べたくてバスターミナルの外を探しあるくが、見つけた店は2件とも営業していなかった。しかたなくフードモールでミニうどんとサラダセットを食べる。これがボリュームたっぷり、サラダと思った皿の下には御飯が隠れていたのだった。

14:40発仁川空港行き急行バスに乗車、18:00仁川空港着、迎え車でスカイホテル18:30着。今夜は韓国最後の夕食だ。蔘鶏湯(삼계탕)を食べるぞとおいしいお店をフロントに紹介してもらい、荷物を部屋に置いて即出かける。

教えられた店で注文を終えて大根キムチを肴にサービスの人参酒を飲んでみると、Aさんの韓国人知り合い金信根さん夫妻が入ってくる。なんと夕食

を共にして、金氏にご馳走になってしまった。話が尽きないAさんと金夫妻はホテルへ。残り4人はお土産の調達にとロツテマートへ。ショッピングカートはデポジット式でコインを入れないとつながったカート列から引き出すことができない。これなら、使用後のカートが散乱することはない。まずはお土産定番の韓国海苔を買い、次はトウモロコシ茶(オクス)を求めて売り場を探し回る。

粒の大袋とティーバックのものを見つけて購入した。帰国後、飲んでみると香ばしいトウモロコシの香りがするお茶ができた。ノンカフェインでこれはイケル飲み物だ。

### 21日(火) 帰国

06:05送迎車ホテル発 仁川空港6:25着、済州(チェジュ)航空7C1102便。

搭乗手続き後、出国審査。書類は不要だった。機内の朝食用にキンパブをテイクアウト。海苔巻きが酢飯だったらもっとおいしいのと思うのは日本人だからかな。

8:30発、成田10:50着

5泊6日の山旅の総費用は7万円(航空券30,000円、現地宿泊費13,500円、現地交通費と夕食代20,000円)文盲の不便さを実感し、Sさんの韓国語力がなければ成り立たなかった山旅でした。

(終り)

### 注記

1) **男妹塔伝説の概略**: 一人の若き修行僧が、洞窟で修行を積んでいた。ある日、虎が女の子を背中に乗せて、彼の嫁にと連れて来た。二人とも好意を持ったが、兄妹として生涯を過した。死んだ後、男妹塔を建てて添わせてやった。

2) **オルゲンイ**(タスルギと呼ばれる地方もある): 淡水にすむ巻貝(キレイな水の中でしか生きられない貝)で、肝臓病や骨粗しょう症の治療や改善、胃や腸などの消化器系の改善に効果があるとされている。しかも無脂肪・高蛋白質! 日本でいうカワニナ(ホタルの幼虫の餌になる巻貝)の種類。

3) **大屯山**: 蘆峰山脈の北部に属する残丘の一つで、浸食された花崗岩岩盤があらわれ、峰々に絶壁と奇岩奇石になっているが、特に頂上の王バウイ(岩)と立石台をつながる長さ81m、幅1mの金剛雲橋は欠かせない名所だ。

(ウィキペディアより)

日本人は中国が好きです。尊敬もしています。といっても中国の歴史のことです。論語は日本人の礼節に影響を与えています。三国志からは劉備と関羽・張飛の友情や諸葛孔明の参謀としての魅力を知りました。赤壁の戦い<sup>注</sup>)に熱狂しました。

しかし、日本人の中国についての知識は、書物から学んだことばかりです。すなわち時の皇帝を中心としたもので、一般庶民の歴史や文化を理解していません。残存する中国の、主として為政者に関する歴史書のほとんどは後継者の都合がいいように改ざんされるのが常です。多くの日本人はこうした歴史上に描かれた素晴らしい中国と現在の中国を「同じ国」と錯覚しているのではないのでしょうか。

一方、中国人は日本の歴史を知りません。大多数が文盲であったこともありますが、知識人(日本留学生など)でさえ明治維新以降の日本しか知りません。孔子の時代には「東夷」に不老長寿の国あり…と知ってはいたようですが、日本もこうした事情を反省し、官民一体で知恵を絞って、日本が縄文時代から継承されている「日本文化」の素晴らしさ、日本の旺盛な外来文化の咀嚼力をPRする必要があります。

以下に王敏さんの著書「中国人の愛国心」から拝借します。



歴史は中国人にとって問題解決のマニュアルである。問題解決には、すぐ歴史上の事例をひも解く。歴史は事例集・判例集でもある。中国人は歴史を鑑とする。中国人の思考形態は「縦」。つまり歴史を柱とする。対して日本人は「横」である。中国人は「従歴史的観点看(歴史的に見れば…)」であり、日本人は「欧米では…」とか「国際的に見れば…」ということになる。日本人は空間的に広い視野を持っており、中国人は時間的に垂直の視野を持つ。



さて、中国人と日本人の考え方を比較してみましよう。まず、健康・医療についてです。「未病＝健

康体をつくる」を上品(最上)とし、対処療法(盲腸手術とか解熱など)を下品とする中医に対して、対処療法(治療)を中心とする西洋医学との違いを理解することが参考になります。現在の日本は西洋(医学)一辺倒です。明治維新と同時によき伝統も根こそぎ捨ててしまいました。

昨今のCool Japan騒動や「和食」の世界遺産登録(予定)の喜び方は異常ではないでしょうか。キョロキョロと回りがどう評価しているかと気にしすぎです。それに対して中国はどうでしょうか。中華人民共和国として1971年に国連に加盟。WTO(世界貿易機関)には2001年に加盟承認されました。経済規模ではGDP世界第2位です。名実共に国際化した中国ですが国の言動は相変わらず「我田引水」です。国連では常任理事国の特権を乱用し、WTOでは反ダンピング・反補助金・反保障措置など係争(調査段階)件数が690件も抱えています。環境問題になると未だに発展途上国の立場を主張します。

中国の歴史を遡れば中華の華は、もとは「夏」でした。「夏」は大きく栄える民族の意を表します。殷に亡ぼされたといわれる王朝でもあります。周辺諸国を南蛮・西戎・東夷・北狄などと野蛮な国として差別していました。中華の王朝は周・秦・漢・晋・隋・唐…と続きましたがトップ(皇帝)が変わっても制度や歴史は継続しているというのが漢民族の伝統です。世界の仲間になってもこの伝統は消えていないようです。現在の共産党とその政府も王朝の継続だ、という意見を持つ人もいます。

中国文明は偉大な発明でも有名です。紙・火薬・印刷・羅針盤を中国の4大発明といいます。いずれの発明も今日の世界近代化にはなくてはならないものばかりです。紙は前漢(BC150～)、火薬は唐代(AD618～)、印刷(木版)は7C、羅針盤は11Cに発明されたといわれています。日本はこれらの発明を利用して発展したことは事実ですが、日本はその上漢字も取り入れてきました。こうした恩恵には感謝します。

とは言え、言うべきことは率直に言える関係を中国と築く必要があります。同時に現代の日本人は、日本



## 中国人にとって「歴史」は判例集

陽光新聞社・顧問 塩澤宏宣

の原点を再度勉強することも必要です。今から3万5千年前の中期旧石器時代には日本列島に祖先がいたという研究が明らかになっています。その後誕生した縄文時代には日本人が誇るべき独自文化の原点があると思います。随所に「今の日本」に引き継がれている縄文人のDNAを見ることができるようです。

私は今、縄文時代に熱中しています。島国ならばこそそのユニークな日本文化。日本人も「縦思考」ができるはずです。

**(注)**

**赤壁の戦い**: 後漢208年、長江の赤壁において行われた曹操軍と孫権・劉備連合軍の間の戦い。三国志最大の見せ場といわれる。優勢だった曹操軍はこの戦いで惨敗を喫した。

塩澤宏宣氏は、在日中国・台湾・香港人向け\*新聞「陽光導報」を発行の、陽光新聞社・顧問をしていらっしゃいます。一昨年年末、'わんりい'が町田市の助成により、平成23年度町田市「つながりひろがる地域支援事業」対象事業として'つなげよう ひろげよう 地域の「輪」と「和」を企画・開催の折、読売新聞の記事をごらんになり'わんりい'の活動をご存じになりました。以来、折に触れて'わんりい'の活動を「陽光導報」で紹介下さっています。'わんりい' 20周年活動記念コンサートにご参加くださり、コンサートの感想をお寄せ頂いたのを機に、'わんりい'への寄稿をお願いしました。 (田井)

\*塩澤氏によれば陽光導報の大部分の読者は中国人(大陸)とのことです。

◆活動報告

## 〈手作り月餅の会〉

2013年11月11日(月) 場所:まちだ中央公民館・調理室

'わんりい'の、手作り月餅が、12月8日の夢広場(於:町田市民フォーラム)プログラム「第1回世界の料理に挑戦しよう! 調理ワークショップ」で参加することになり、その事前の手ならしを兼ねて、中秋には遅ればせながら今年も、'わんりい'月餅作りのベテラン・有為楠女士を囲んで10名が月餅作りを楽しんだ。

振り返ってみると、何媛媛さんのご指導を頂いて月餅作りの講習会を開いたのが、2009年で、既に5年になる。餡は毎年工夫が凝らされ、年々微妙に味が異なるところが、手作り月餅の面白さだと思う。

加えて言えば、月餅作りのきっかけになった、山西省の村でも村を上げて月餅作りをしていたが、月餅作りも、餃子作りも、包子づくりも10月に教えて頂いたチマキづくりも、皆でワイワイ言いながら作ることに楽しさがある。

今は、便利になって文明の利器が手助けしてくれるし、敢えて手作りしなくとも買ってあげれば何でもすぐ手に入るが、その昔は家族と一緒に笑いながらハレの日のご馳走づくりをしながら家族の和を培っていたのかも改めて思う。

この日出来上がった月餅は、120個以上で、焼き上がりや皆で賞味したほか、お一人10個のお土産がついた。皆さん、来年は是非ご参加を!

(報告:田井)



丸められた三種類の餡(小豆、カボチャ、ナッツ)と月餅の型



こんがり焼き上がった月餅

スリランカでの日々の生活は、正直言ってそんなに快適というほどでもない。1年中ほとんど変わらない気候は四季のある日本と比べると、身体に感じる心地よい変化もなく、何かをしようと思っても意欲が起こりにくい。またバラエティの乏しい食べ物も、何を食べてもどこで食べても、みな同じような感じで満足を感じる度合いが非常に少ないと言える。

今回は毎日の生活の中で見たことや感じたことを写真と共に紹介してみたい。以前にも書いたが、私が住んでいる家は2階建て(一部3階建てで、ここには仏陀礼拝室と使用人部屋がある)で、1階には別な家族が住んでいて私は2階に住んでいる。下に住んでいる方たちは若夫婦に子供(まだ1歳少々)とご主人のお母さんで、ご主人はコロンボの病院に勤めている。毎朝7時過ぎには車で出掛けて、帰ってくるのは夜9時近くになることが多く、土曜日も出かけている。スリランカ版猛烈サラリーマンというところか。

奥さんのお母さんも孫の面倒を見るために時々来ることがあり、よく顔を合わせる。彼女は昔研修のために名古屋にあるノリタケ陶器で働いていたことがあり、日本語がかなり出来る。時々孫をあやしなながら「四季の歌」のメロディーを口ずさんでいるのが聞こ

えたりする。一瞬、ここはどこなのか、と思ったりしたことがあった。

6月頃、子供の誕生日にお招き頂いた。親戚や家族の方々を招き、また私も同じ家に住んでいるということで招かれたが、スリランカでは本当に子供を大事にしていることがわかる。誕生日だけでなく、普段から両親の祖父母に守られて大事にされていて、時には過保護のような気もしないではないが・・・。

私が住んでいる家の大家さんは、スニル・カリヤカラワナ(Snil Kariyakarawana)さんといい、南部の出身で、現在はイギリス・ロンドンに住んでいる。ケラニヤ大学出身で、一橋大学と立教大学に留学したこともあり、しばらくケラニヤ大学で教えていたことがあった。

日本での留学体験があるせいか日本に対する関心が強く、日本人に対しても何かと好意を寄せてくれる。彼とは普段メールでやり取りしているが、昨年12月と今年になって8月にスリランカに戻って来て、ここにしばらく滞在した。昨年は一人で来たが、今年は家族6人(ご夫妻、子供2人、祖母、親戚の女性)+使用人1人を連れてきて、非常に大変だった。夫妻には4歳になるスダムと言う男の子がいて、とにかく手におえなく、普段はおとなしくしているが、気に入らないことがあると、親をたたいたり、物を投げたりする。時には泣き叫ぶことがある。

私には最初人見知りしてなかなかつかず、10日間ほどは全く見向きもしなかった。しかし、毎日接してきたせいか、その後私のことを「センセイ」と呼ぶようになり、やっと一緒に遊ぶようになった。お別れする時に「センセイと別れたくない。一緒にいたい」と泣きだし、父親が「やっと友達になれたね」となだめながら別れた。ロンドンに戻ってから、彼はしばしばセンセイのことを話していると父親から電話があった。



階下の子供の誕生パーティ



彼らがここにいる時は祖母が食事を作ってくれた。ごく普通のRice and Curryであるが、彼らは南部出身者なので赤米を好むようで何度も赤米が出てきた。その上、肉よりは野菜をたくさん使い、毎日色とりどりの野菜を食べることができた。祖母の料理は素朴で、ごく普通の家庭料理である。一般的にスリランカ人は3食ともご飯を食べる人が多く、その食べる量ときたら日本人の2倍は優に食べている。道理で太っている人が多い訳だ。裕福な人ほど太っている人が多い。

時たま家の管理や修理に泊りがけで来てくれる青年がいて、名前をブッディカ(Buddika)といい、何度か顔を合わせたことがある。しかし、彼は聾啞者で、口がきけない。普段、家主とは手話で話しているが、家主がいない折どうしても伝えたいことがある時など大変難儀した。日本語の手話は少し勉強したことがあるので、それを使って会話を試みたが、やはり全然違うようでコミュニケーションは難しかった。それで書いて意志を伝えることになったが、彼はあまり英語の方は得意ではなさそうで、これまた大変だった。どうにか最後にはお互いの意思を理解することが幾分かできるようになり、私にとってもよい経験となった。

ブッディカはある時写真を見せてくれた。それは彼の結婚式の写真である。今年の8月5日に式を挙げたそうで、幸せそうに写っていて、見ているこちらまでほのぼのとした気持ちにさせられた。「相手はどんな人？」と尋ねると、彼と同じように聾啞者で、毎日の生活はそれなりに大変であるが、周囲の人が助けてくれるので、とても幸せだと語ってくれた。

スニル氏の家にいると、スリランカの普通の家庭で見る人間関係、家族の姿、彼の北部出身者と南部



手に負えないスタム



赤米を使ったライス&カレー

出身者の違い、彼を取り巻く様々な人々の様子など手に取るようにわかり、興味深いものがあった。

スニル氏は弱者に対しては大変思いやりが深く、恐らくそれは仏教に対する信仰からきているのかも知れない。彼は大変熱心な仏教徒で、先に記したように3階に礼拝室があり、そこで毎日夕方家族と共にお経を唱えている。彼とは時折メールでやり取りをしているが、数日前にスニル氏から頼まれたと2人の男性が訪ねてきた。家の中の電気や水道の点検をしてくれて、ちょうど水道の水の出が悪いところがあったのですぐ直してくれて、大いに助かった。

スニル氏の家族はイギリスに戻り、私はスリランカでの任期を終えて日本に戻るが、彼や家族の方たちとはもう会えないと思うと寂しい気がする。また将来いつか会えることを期待したい。



ブッディカの結婚式の写真

皆さんは「カーフェュー」という言葉を御存じですか？僕はスリランカに赴任するまで知りませんでした。英語ではCurfewと綴ります。元々の意味は家に帰る合図の晩鐘の事ですが、現在では転じて戒厳令下の外出禁止令という意味になります。

僕が赴任していた当時のスリランカはLTTE (Liberation Tiger of Tamil Eelam タミル・イーラム解放のトラ) との内戦が激しい頃でした。コロンボ市内の政府庁舎や軍事基地、中央銀行等がLTTEの攻撃の目標とされ、ほぼ2～3カ月に1度の割合で市内でも時限爆弾や人間爆弾による爆発が起きていました。

コロンボはそんなに大きな街ではないので、市内のどこかで爆発が起これると事務所に居ても衝撃で建物が揺れ、椅子に座っていれば体が浮き上がります。この様な状況になると、死傷者の収容が終わって暫くするとテレビやラジオを通じて外出禁止令が発令され2日～3日ぐらいは身動きが出来なくなります。

発令後数時間もすると許可書を持たずに戸外にいると軍隊・警察によって拘束されたり、へたをすれば射殺されても文句が言えません。スリランカ人スタッフは慣れたもので、爆発が起きると直ちに帰り支度を始めて、外出禁止令が発令される前に急いで家路につきます。確かに外出禁止令が発令される頃には、事務所の前の道路はあらゆる交通手段を使って急いで帰る人達で大渋滞が始まってしまうので、一刻でも早く帰ろうとします。

スリランカ人スタッフが帰った後は、日本人スタッフが大忙しになります。コロンボ市内だけではなくスリランカ各地に散らばっている現場への、安全確認と外出禁止令発令中の注意事項の伝達。通信網も混乱しているので簡単には出来ません。

現場への連絡が終わると、各現場の日本人スタッフがコロンボに残している家族の安否確認を始めます。繁華街に近い政府庁舎等が狙われる事が多いので、外出中に巻き込まれている可能性があるからです。コロンボ事務所の日本人スタッフの家は、事務所から歩いて行ける範囲内にあるので安否確認は簡単です。

ところが、現場で働いている日本人スタッフの家は市内各所に散在するので連絡が大変です。市内電話は回線が一杯になっていて繋がり難くなっているので、家に直接出向いて確認する事になります。道路は大渋滞で車での移動は難しくなると同時に、この頃には外出禁止令が実効される時間が近づいてきています。そこで、一人だけ残しておいたスリランカ人スタッフと共に最寄りの警察署に行って許可書を申請しますが、警察署も渋滞の交通整理や何やらの人手不足のために事がスムーズに運びません。ようやく許可書を手に入れて警察署を出る頃には、道路はガランとしていて、軍用車両と警察車両しか走っていません。

街角には急ごしらえの検問所が設けられ、フル装備の軍人が銃を構えて緊張した眼差しで周囲を見回しています。普段は弛緩した雰囲気警官も防弾チョッキを着用し楯を構えています。

家族の安否確認の為に車を走らせていると、検問所の度に停車させられ、許可書に記載されている名前とパスポートに記載されている名前の照合です。OKが出るまでの間、殺気立った兵士や警官に囲まれて緊張しますが、OKが出れば兵士達も表情が穏やかになります。きっと兵士達だって怖いのでしょうね。

世の中には間の悪い人がいます、外出禁止令が出ているさ中に転勤や出張で空港に到着する人たちです。搭乗前に外出禁止令が出ていると伝わっていればキャンセルする事も出来たでしょうが、フライト中に事件が起きて外出禁止令が出たら諦めるしかありません。

普段ならば、スリランカらしく簡単にイミグレや税関を通過できるのですが、この時ばかりはしっかりと調べられます。ようやく到着ロビーに出ると今度は、戦闘服を着た兵士達が銃を構えてお出迎えをしてくれます。機内である程度は聞いているのですが、結構緊張した顔で迎えに来ている僕たちの前に現れます。ホテルまで送る間にも何力所もの検問所で止められ、外出許可書とパスポートの照合が行われます。転勤者等はこの事によって紛争国に来たのだと実感した事でしょう。

余談ですが、僕が赴任して初めて外出禁止例が発令され、事務所の窓からガラガラになった道路を眺めていた時の事です。同僚日本人スタッフが寄ってきて、並んで外を見ながら「赤岡さん、カーフェューって Car fewと書くのですよ」と教えてくれました。外出禁止令なんて生まれて初めての経験だったので少し緊張

していたのか、この言葉を真に受けてしまい僕は、「それで車が少ないんですね」なんて答えてしまいました。もちろん、周りにいた人達は大笑いです。暫くの間、何で笑われているのか判りませんでした。緊張している僕を和ませるための冗談だったのです。

## 『スリランカの民話』（第二版）の出版に関わって

～ 日本とスリランカを結ぶ人々 ～

中国児童文学研究会 金子総子

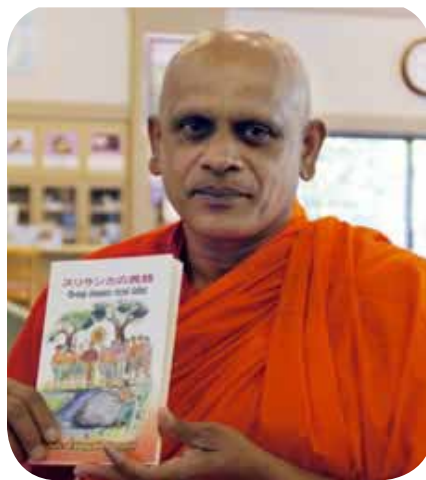
今年10月中旬、‘わんりい’の会員・松林蓉子(浄蓉)さんから、出版されたばかりの「スリランカの民話」という可愛い本が送られてきました。どこの国の民話も、その国の人々の生活や考え方を映し出していて楽しいものですが、「スリランカの民話」も、赤岡健一郎さんや為我井輝忠さんが長い間紹介下さっているスリランカとスリランカ人に生で触れるようで嬉しくなりました。松林蓉子さんとのご縁で、第二版の出版に関わった金子総子さんから「スリランカの民話」出版の経緯紹介の一文が届きました。(田井)

一昨年の夏の終わりころ、親しい友人で佛教エッセイストの松林浄蓉さんからスリランカ僧のタランガッレー ソーマシリ師を紹介され、昨年3月そのご縁で初めてスリランカの「平和寺(サマ マハ ビハラヤ)」を訪れました。初めて訪ねたスリランカは5泊6日の短い旅でしたが、美しい海と空、美味しいお食事、豊富な果物、仏教に根付いた人々の暮らし、穏やかな街のたたずまいなど、すぐにもまた訪ねたいと思うほどに気に入りました。

それまで全く無知だったスリランカの国情や歴史、文化、宗教、生活、教育など、知りたい事ばかりで、図書館に行ったり、関連図書を読んだり、千葉県香取市にあるスリランカ仏教寺院の「蘭華寺」にも二度出掛けて、スリランカとの距離がぐっと縮まりました。

ソーマシリ師は1960年に生まれて13歳で出家し、スリランカのケラニヤ大学で考古学を学び、ヌワエリヤ市のリンドラ高等学校で宗教、国語、歴史を教えていました。スリランカ仏教界と日本の支援者たちの熱い思いが実って、1989年に千葉県佐原市(現香取市)にスリランカ寺院「蘭華寺」が建てられ、日本

とスリランカの交流の拠点として活動を始めました。それに先立ち、ソーマシリ師は1988年に日本に派遣され、日本に来てから千葉県の市川日本語学校で初めて日本語を学び、2年後の1990年には大正大学梵字学科に進み、卒業後は筑波大学の考古学研究生として1年半ほど在籍しました。その後、蘭華寺を本拠に市民に佛教講話をするなど、日本とスリランカの交流を深める様々な社会活動を行ってきました。



ソーマシリ師

コロンボ市から車で1時間ほどのところにあるガンバハ市にある「平和寺」は、1931年に建てられたお寺で、世界平和に貢献した三代目住職の時に「平和寺」と名付けられ、2001年にソーマシリ師が四代目の住職になりました。今でも毎年2・3か月間は蘭華寺に来て、日本との絶え間ない交流の為に寸暇を割

いています。その成果の証として、平和寺には「證願寺幼稚園」「三輪日本語学校」など日本名のついた施設があり、新たに松林さんの寄進による「蓮華コンピューター学習センター」ができ、若いお坊さん達がコンピューターの勉強に励んでいます。

今年の1月10日から4泊5日でスリランカへ行き

ました。これはかねてから着工していた「日本文化会館」の落成式に出席するためです。「日本文化会館」も松林さんの尽力で建てられましたが、展示品は有志の人々から、日本の和服、食器、おもちゃ、お雛様や、五月人形、羽子板、お琴、民芸品など、日本の様々なものが集められ、小皿まで一点、一点と数えれば、3千点近い日本の品々を直接目にし、触ることができるので、日本を紹介する絶好の場所となりました。

平和寺には1972年に開校した国際比丘養成学校があり、70人ほどの僧侶が学び、平和寺の僧だけではなく、遠くのお寺からも希望者があり、30人くらいはお寺で起居し、卒業するとインド、日本、中国、ロシアなどの国々で伝道布教の活動をしているそうです。平和寺の写真の中に白い制服の少年少女が大勢写っているのがありました。日曜学校の生徒で、毎週日曜日の朝8時から12時まで、500人くらいの小学生、中学生、高校生が通って来て、いくつかのクラスに分かれ、お釈迦様の生涯、教え、経典、仏教文化などを学

ぶのだそうですが、このような教育環境に育てば、仏教国として、仏教の教えをもとにした生活ができるのも頷けました。

今のスリランカでは外国語を勉強している子供の中で日本語を勉強する子供たちが圧倒的に増え続けているようで、ソーマシリ師は2003年に子ども達の日本語の教科書になるように『スリランカの民話』を出版しました。また日本人にスリランカの事をもっと理解して貰えるように、との願いも込めて書かれたそうです。

この本を初めて手にした時、その挿絵の素朴で、昔の人々の様子が身近に感じられ、「日本でも売っているのかしら?」(それなら買いたい)と思ったことでした。ところが、ソーマシリ師の希望は、本は平和寺の中にある印刷所で刷れるものの、出版して10年もたつので、この度は新たに版を起して刷り直したいとい

うことでした。

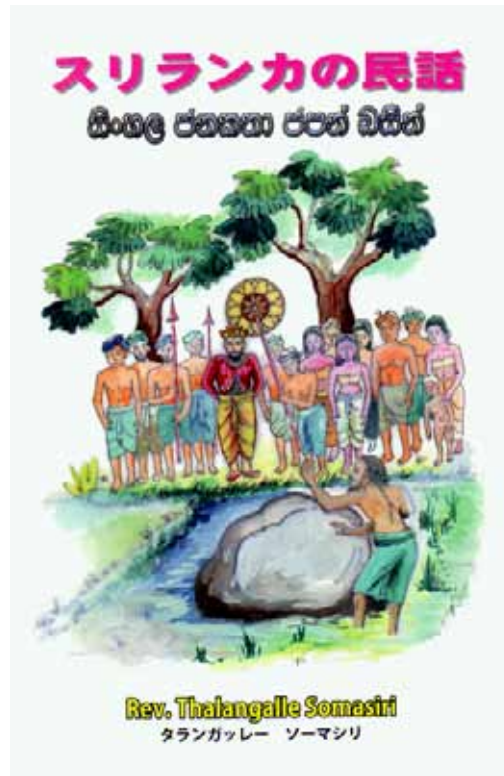
「序文」「前書き」から始まり、本文25話と「解説」まで122頁に及ぶ一冊の本をまるまる打ち込むのは難しい事だと思いましたが、周りに引き受けてくれる人も見当たらないのでやむなく引き受け、今年のお正月早々からパソコンに向かいました。文章を打つのはまだしも、全ての漢字にルビを振る作業は思ったより手間取り、8月末にようやく完成しました。

平和寺には印刷機も製本機もあるので、その本一冊分のデータがあればお寺で何冊でも完成品を作ることができるのですから、そのデータを作る約束をしたのですが、どのようにしたら良いのか分からないので、しばらくは手が付けられず、今年になって知人に印刷所を紹介して貰い、印刷屋さんにこちらの要望を説明して、見本として100冊だけ製本し、データをお寺に渡すということになりました。

この作業にはもう一人、有力な協力者がありました。私がパソコンで打ちだした原稿を、

本文と一字一句を見比べて、ルビの中の促音、撥音まで気を配る丹念さで、この本が‘スリランカの子供達の日本語の教科書になる’ということの意義を考えて、わずかな誤字も脱字も見落としませんでした。

8か月間、ただ本を写すだけの単調な作業の上に、一字一字ルビを振り、一頁打つのに時間もかかり、打ち終わったらもう見直す気もしない作業ですから、この校正の仕事を引き受けて最後まで真剣に取り組んでくれた友人の藤井幸子さんがいなければ、こんなに順調には進まなかったことでしょう。時間も無く、疲れてパソコンに向かう気にもなれない時でも、前回届けた原稿に赤字を入れ、付箋をして待っていてくれる藤井さんに会うのが楽しみで、作業は先へ、先へと進み、ソーマシリ師がスリランカに帰国する数日前の9月18日に「第2版」が我が家に届いたのでした。



## サハ共和国・ヤクーツクだより ⑦

杉嶋俊夫

前号に続き、6月中旬以降に現地で体験したことを記していきます。

大学で私が担当する授業は6月上旬で終わりましたので、たびたび街に出られるようになりました。6月は前号でも触れた極北芸術文化大学の催しに参加する機会が何度かあり、バレエ劇場では、小さいスペースを借りて同大学の学生たちによるミニ・ファッションショーが行われました(写真1)。学生の作品とはいってもなかなかのレベルで、斬新なデザインのもの、近未来的なものなどがあり、短時間でしたが楽しいひとときでした。同じ頃、国立図書館でサハの伝統衣装に関する新著のプレゼンテーションがあり、そちらでは伝統的な衣服の美しさを堪能しました。

それらと前後して、ドイツ人作家の小説をもとに作られた映画の上映会と小説の朗読会が行われました。その作家自身がヤクーツクを皮切りにロシア各地で上映会を行うというプロジェクトで、彼は伝統文化が強く残るサハで現地の人々と交流できたことをとても喜んでいました。じつはその映画は、サハと同じトルコ系のシベリアの民族が住む町でドイツ人ビジネスマンが現地の女性と恋に落ちるといったストーリーで、意外性の塊のようなユニークな作品でした。サハを舞台に

こういう作品を作っても面白いかなと思いました。

市内にある世界諸民族口琴博物館では、私がお世話になった北東連邦大学の留学生・外国人教師らを集めて、歌と口琴とサハの伝統文化をテーマにした交流会が行われました(写真2。口琴については、わりい184号参照)。多言語が飛び交う空間で遊び、踊る若者たちの姿は、ほのぼのとしていて心安らぐものでし



2 ホムス(口琴)博物館・国際交流の集い

“ひも巻き競争”の様子。長さ5mぐらいのひもの両端を持ち、早く巻き込んでいって先に真ん中の目印まで巻いたほうが勝ち、というゲーム。サハの伝統的な遊びのひとつだそうです。向かって左側はトルコ、右側はベトナムの留学生。



1 学生ファッションショー

極北芸術文化大学の学生たちが自分でデザインした衣服のミニ発表会。伝統的なスタイルのもの、モダンなものなど、目を楽ませてもらえる作品の連続でした。ショー以外にもこうした作品がもっと人々の目に触れる機会があったら楽しいだろうなと感じました。



3 北方諸民族言語文化学部の夏至まつり

ヤクーツク市から車で西へ一時間ほど行った自然の豊かな場所で教員20名、学生15名程度でこじんまりと過ごしました。この写真は、女性学生たちによるオープニングの踊り。踊りの動作のひとつひとつに意味があるとのことでした。

た。意外なことにその催しは実験的に今回初めて行われたとのことでした。

毎年、6月に入ると、サハ共和国の各地で夏至まつり(馬乳酒まつり)が行われます。サハの文化の象徴ともいべき重要な行事です。いわば(伝統文化においては)正月の意味を持つお祭りで、地域によってスタイルに多少の違いがあるようです。私は6月中旬と月末に一回ずつ参加することができました。前者は、北東連邦大学の北方諸民族言語文化学部の教員たちが身内で行なっているもので、学生たちの踊りでスタート、教員らのスピーチ、学生による歌や口琴の演奏と続き、最後はみな輪になって踊りました(写真3)。町から会場までは車で往復2時間、道が悪く、座席から何度もころげ落ちそうになりましたが、それも楽しい思い出になりました。

後者の夏至まつりは、国外でも知られる有名なもので、昨年、前述の、輪になって踊る踊りの人数の世界記録で、ギネスブックに載りました。この月末に行われる祭りは様々な企業や団体の宣伝も兼ねており、物品の販売もあちこちで行われていました。この祭りに合わせてユーラシア諸民族のファッションショーも行われました。日本からも若い女性デザイナーが出品されていて、少しだけご本人とお話できました。

6月末は白夜で、夜になっても日が沈みません。祭りの一日目の深夜、明るい屋外で伝統的な儀式が始まりました。しきたりにのっとって会場の中心で祈りの儀式が行われ、集まった人々が日の出を迎えます(写真4)。この一種神秘的な光景は一生忘れないでしょう。二日目もスポーツを中心に様々な催しが行われたのですが残念ながら参加できませんでした。

翌月、大学の教員たちの業務はほとんど終わっていましたが、同僚たちのいない職場で最後の仕事を片付けているうちに帰国の日がやってきました。その数日間、あまり寂しさを感じる暇もありませんでしたが、ヤクーツクで過ごした4か月弱の時間が今、意外な形で私に影響を及ぼしています。では、今回はこのへんで・・・。

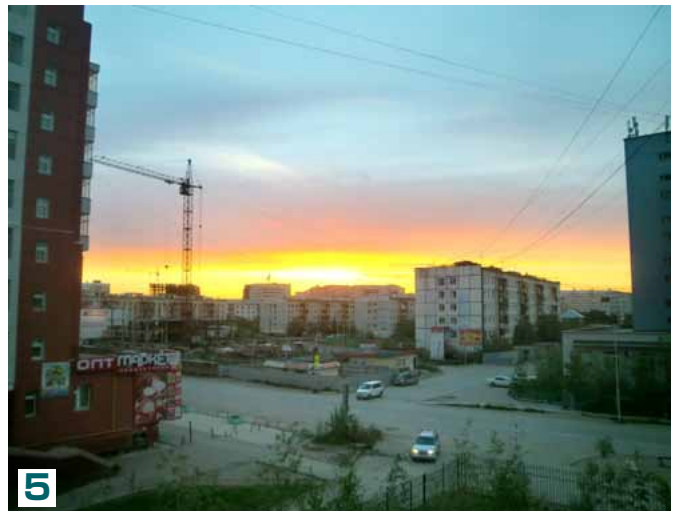
\*サハや北極圏の自然と人々の暮らしを伝える Galya Morell さんのホームページ (<http://galyamorrell.com>) をご紹介します。ぜひ一度ご覧ください。



4

#### ヤクーツク市郊外の夏至まつり

毎年恒例のサハ最大(?)の夏至まつり。必ず土日の二日間かけて行われます。この写真は、土曜の深夜3時頃、地平線から上がってくる太陽に手のひらを向けて立つ人々。こうしてエネルギーをいただくのだそうです。



5

#### 白夜

ヤクーツクは5月から昼(明るい時間)が夜よりも長くなり、夏至の時期は白夜になり、日が沈みません。この写真は6月中旬に寮の自分の部屋から撮ったもの。同じ時間帯でも日によって雲の形が違い、度々この窓から写真を撮りました。思い出深い写真です。

杉嶋俊夫 略歴:東京都町田市生まれ。千葉大学卒。大学で認知心理学を専攻、途中で言語学に転向、シベリア先住民の言語を学ぶ。院在籍時に西シベリア・トムスクの大学に留学したことがきっかけで、トムスク市やロシア西部・リャザン市にある大学で日本語を教える。今回の派遣も、リャザン大学の時と同じ日露青年交流センターの派遣プログラムによる。

## 第16回 町田発国際ボランティア祭 2013 夢広場 この星に平和と希望を

▲日時：12月8日(日) 10:00～16:00  
▲会場：町田市民フォーラム・3F全フロア

### 夢広場ニュース

特別出演のオペラ・バリトン歌手 **崔宗宝**さんが、夢広場で歌う予定曲が決まりました! ピアノの伴奏付きでオペラ歌手の本格的な歌唱が聞けます! 町田市民フォーラム・ホール 12:00～12:30  
入場無料!!

ナポリ民謡(カンツォーネ)から「私の太陽(オー・ソレ・ミオ)」・「帰れソレントへ」  
オペラ椿姫より「プロバンスの海と陸」(G.ヴェルディ)/シューベルト歌曲「アヴェ・マリア」他

■主催：2013 夢広場実行委員会 ■共催：(財)町田市文化・国際交流財団  
■問合せ：☎042-722-4260 町田国際交流センター

◇わんりいの催し

### 中国語で読む・漢詩の会

▲場所：まちだ中央公民館  
▲月日：12月15日(日)音楽室2  
          '14年1月19日(日)学習室7  
▲時間：10:00～11:30  
▲講師：植田渥雄先生(現桜美林大学孔子学院講師)  
▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)  
▲定員：20名(原則として)  
\*録音機をお持ちの方はご持参下さい。  
◆申込み：☎050-1531-8622(有為楠)  
          E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp(同上)



◇わんりいの催し

### ボイストレーニングをして 日本の歌を美しく歌おう!

◆動きやすい服装でご参加ください  
▲場所：まちだ中央公民館・6F視聴覚室  
▲月日：12月17日(火)と1月14日(火)  
▲時間：10:00～11:30  
▲12月の練習歌「おじいさんの古時計」  
▲講師：Emme(歌手)  
▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)  
▲定員：15名(原則として)  
●申込み：☎042-735-7187(鈴木)  
          E-mail:wanli@jcom.home.ne.jp(田井)



### 岡上中国語研究会新会員募集

中国語を中国人先生から直接聞いて話して勉強してみませんか? 中国語が初めての方大歓迎。直接見学も大歓迎。

▲日時：毎週土曜日 10:00～12:00  
▲場所：麻生市民館岡上分館  
          215-0027 川崎市麻生区岡上286-1  
▲講師：劉冠群先生(北京出身)  
▲会費：月謝3,500円  
▲お問合せ：☎044-988-2031(本間)  
          E-mail:tizm2008@jcom.home.ne.jp(和泉)

◆まちだ中央公民館への行き方：

小田急線南口徒歩5分 / 横浜線ルミネ口徒歩3分  
町田市原町田6丁目8-1 町田センタービル109

### 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついで折に田井にお渡し下さい。

恒例! 'わんりい'新年会日取り決定!!

## !!! 2014 'わんりい'新年会・シュワンヤンロウで新年を祝おう!!!

場所：麻生市民館・料理室(小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)

2012年2月2日(日) 11:00～14:00

- 定員：先着40名('わんりい'会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費：1500円(会場費 シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入)
- 申込：メール/wanli@jcom.home.ne.jp TEL/FAX:042-734-5100





## 2014年 第3回 海老名ニューイヤーコンサート 新年恒例! 崔宗宝&森麻季(ソプラノ)が贈る新春の慶び

出演: メゾソプラノ/ 杉友恵子(二期会会員) テノール/ 薛皓垠(中国期待のテノール歌手)  
二胡/ 霍晓君 エレクトーン/ 赤塚博美 ピアノ/ 金井信 ゲストピアノ/ 千釜有美子



2014年1月5日(日) 15:00開演(14:30開場) 会場: 海老名市文化会館・大ホール

プログラム(予定): オペラ「椿姫」より: 前奏曲、乾杯の歌、花から花へ、プロヴァンスの海と陸  
オペラ「カルメン」より: ハバネラ オペラ「ボエーム」より: 冷たき手を 他盛り沢山な歌曲を楽しむ

- 参加費: 全席指定 4,000円(当日: 4,500円)
- 問合せ&申込: 046-240-0836(崔宗宝音楽事務所)

主催: 崔宗宝音楽事務所 共催: 海老名市文化会館指定管理者、相鉄・共立共同事業体

ジャンシャオチン

## 姜小青 コンサート ~古箏が奏でる煌めきの旋律

<http://jiang-xiaoqing.xii.jp/schedule/t20140116.html>



出演: 姜小青(古箏)馬平(打楽器・中国木琴) 西本梨江(ピアノ)

2014年1月16日(木) 14:00開演 会場: 横浜・関内ホール

<http://kannaihall.jp/>

- プログラム(予定): 冬雪~果てしない夢を(姜小青)、戦台風(王昌元)、蘇州夜曲(服部良一)、ラストエンペラーのテーマ(坂本龍一)、絲綢之路(喜太郎)、ノクターンOp.9-2(ショパン)、ウイリアム・テル序曲(ロッシェニ): 他
- 参加費: 全席指定 4,500円 ●問合せ&申込: ☎: 080-1304-7347(村山)
- 主催: MIN-ON



## ジャン シャオチン コンサート2013

~心に響く古箏の調べ~

<http://jiang-xiaoqing.xii.jp/schedule/t20131221.html>

2013年12月21日(土)

14:30(開場: 14:00)

アトムCSタワー ホワイトギャラリー

港区新橋4-31-5、8F

- 参加費: 全席自由 3,000円
- 申し込み・お問い合わせ: ☎080-1304-7347(村山)  
FAX: 045-313-5188

主催: 姜小青フレンドリーコンサート実行委員会



## 'わんりい' 189号の主な目次

北京雑感(80)北京の秋空 .....	2
諺・慣用句(25)「隴を得て蜀を望む」.....	3
媛媛讲故事(59)「南柯太守の夢IV」 .....	4
「中国の笑い話」(11) .....	5
中国-城市めぐり(29)「哈爾濱市」③.....	6
雑記帳(98)犯罪被害者週間によせて .....	9
日本探検記(九)「ピーターパン」の感想 .....	10
真夏の韓国低山歩き(3) .....	11
中国人にとって「歴史」は判例集 .....	14
'わんりい' 活動報告「手作り月餅の会」.....	15
スリランカ・ケラニヤ便り⑧日々の生活の中で .....	16
スリランカ紹介(73)「カーフェー」.....	18
「スリランカの民話」(第二版)の出版に関わって .....	19
サハ共和国・ヤクーツクだより⑦ .....	21
'わんりい' 掲示板 .....	23・24

和光大学 レクチャーコンサート2013  
クリスマスに古楽器ヴィオラ・ダモーレを聴く  
古楽器の暖かい音色でクリスマスの夜を過ごそう!

2013年12月25日(水)

18:30 ~ 20:30(18時開場、途中休憩あり)  
和光大学ポプリホール鶴川(地下2階ホール)

- 受講料500円 ●定員200名(先着順)
- お申込み方法  
①氏名(フリガナ) ②〒・住所 ③電話番号  
を記入し、12月18日(水)までに下記へ

「和光大学企画広報係 大学開放センター」

☎: 044-988-1433 FAX: 044-988-1594  
E-mail: open@wako.ac.jp

## 【12月の定例会と新年号のおたより発送日】

- ◆定例会: 12月6日(金) 三輪センター第3会議室  
13:30 ~
- ◆新年号のおたより発行日: 12月28日(木)  
三輪センター第3会議室 11:00より発送準備

皆さま、お元気でよい年を迎えられますように!!